（1）　明治20年創刊　第37822号（第3種郵便物認可）　（日刊）

前小渕首相の銅像を

きょうサミット開幕

「恩に報い、たたえたい」

沖縄で声上がる

年内建立目指す

【那覇＝吉田典史上毛新聞記者】沖縄サミット（主要国首脳会議）が二十一日開幕するが、歓迎ムードに沸く沖縄県民の間で故小渕恵三前首相の銅像建立計画が浮上している。「沖縄開催を英断した前首相の恩に報い、その功績を永くたたえよう」と、地元の経済界や小渕恵三沖縄後援会などから声がかかり、県も「サミットが終ったら、小渕さんを記念する任組みを考えたい」（稲嶺恵一知事）と前向きだ。県民運動として盛り上げを図り、前首相が発行を決めた二十円札での募金構想も検討されている。前首相が「第二の故郷」と愛した沖縄で、その思いが脈々と受け継がれようとしている。

KYUSHU-OKINAWA SUMMIT 2000

「小渕さんへの思いを持っている人は、沖縄にいっぱいいる。小渕さんがいなかったら、沖縄サミットは百パーセントなかった。その勇断を私どもは忘れない。その思いはさっきりと受け止める。」稲嶺知事のこの言葉に代表されるように、前首相に対する県民の気持ちは、無念の死によって一層高まっている。

「今回のサミットは小渕さんのサミット」。小渕後援会の大城宗憲理事長（南都ワールド会長）をはじめ、会議誘致に携わった、「小渕さんは沖縄人だった」と思い出を語る。

ゆかりの深い人たちは、一様に口をそろえる。

そうした中で、「何かを残したい」の強い気持ちが浮上したのが銅像建立。首脳会議が開かれる名護市の万国津梁館の歴史検補地とし、サミットの推進組織「全県民的なものにし、後援もその一翼を担う形で実現した」（大城理事長）ことなどから、主要国首脳の歓迎と感謝の気持ちを表すために開催され、首脳会議（沖縄サミット）のための沖縄を訪問し、同日に那覇市内のホテルで開かれる沖縄県主催の首脳会食（歓迎レセプション）に出席する。帰京は二十三日。歓迎レセプションは沖縄県を代表する「沖縄視点」を打ち出すとの狙いがあるとみられる。

故小渕恵三前首相の千鶴子夫人は二十一日、主要国首脳会議（沖縄サミット）レセプションでは沖縄の伝統舞踊などが披露される。沖縄でのサミット開催は小渕前首相が決断し、千鶴子夫人も来日する首脳夫人を中心に沖縄視察を行い、サミットの準備を進めていた。

「小渕さんは沖縄人だった」

ウチナーンチュ

故小渕恵三前首相は早大在学中から沖縄に関心を持ち、学校に旨の丸を掲げたり、本土復帰運動、遺骨収集に携わった。「小渕さんは前首相への思いを絶たがたかったナンデガ（沖縄人）だった。きっこのことのように思い出を語る。

去後二カ月を過ぎたなも、前首相への思いを絶たがたかったナンデガ（沖縄人）だった。きっこのことのように思い出を語る。

「栄誉院議員小渕恵三沖縄後援会事務所」。那覇市内中心部にあるビルの四階には、「今おこの看板が掲げられている。後援会理事長の大城宗憲さんが会長を務める南部ワールドの本社に併設された事務所は、往時のままだ。

「島の南部で遺骨収集に汗を流した時、小渕さんはじっと海を見つめてしばらくたたずんでいた。本土復帰前に沖縄人が差別されていたこと、飲みに行った帰りにタクシーに乗車拒否されたり、「琉球人は沖縄人だ」と言われたりしたことなどを分かっていた。沖縄の人は、本当に沖縄のことを分かっていた。沖縄の人は、本当に沖縄のことを分かっていた。沖縄の人は、本当に沖縄のこと